

Anglo-Saxon語の継承と変容 オープン・リサーチ・センター整備事業に選定

平成17年度文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業に、本学の研究プロジェクト「Anglo-Saxon語の継承と変容」(大学院社会知性開発研究センター／言語文化研究センター、研究者18人、代表・松下知紀教授＝大学院文学研究科)が採択された。

本学は15年度から「フランス革命と日本・アジアの近代化」、16年度から「アジア諸国の産業発展と中小企業」と「イノベーション・クラスター形成に向けた川崎都市政策への提言」が展開されており、3年連続で同整備事業に研究プロジェクトが選定された。

「Anglo-Saxon語の継承と変容」研究プロジェクトでは、5世紀半ばからブリテン島(イギリス)で使われた英語の原型Anglo-Saxon語が、どのように継承され、変容していったかを中世英詩から探り、同研究分野において、世界基準に適合する国際的研究拠点を目指す。

中世英文学の作品は大半が手稿写本だが、その文字認識研究を起点とし、基礎資料を包括的に集積してデータベース化し、革新的な科学技術を駆使して研究を進める。Anglo-Saxon語は古英語から中英語を経て変化していったが、頭韻詩と脚韻詩作品に特徴的な語彙、文体などの研究を進めて、その総合的なデータベースを構築する。

扱われる文学作品は、中世英文学に多大な影響を与えた中世フランス詩 Roman de la Rose(『薔薇物語』)、中世イタリア詩 Divina Comedia、Geoffrey ChaucerのThe Canterbury Tales(『カンタベリー物語』)、Troilus and Criseyde、William LanglandのPiers Plowman(『農夫ピアズ』)などがあげられる。

加えて、現代英語を中心に研究が進んでいる生成文法理論の成果を、Anglo-Saxon語の分析にも応用し、言語変化や言語獲得の過程を実証的に解明していく。

本研究プロジェクト代表の松下教授は「今回の採択により、海外の貴重な写本や初期印刷本などの資料購入が可能になり、国内外の国際研究機関の研究者と連携し、より多角的に柔軟に研究を進めることが出来る。また、本学の若手研究者育成にも貢献出来ることは大変喜ばしい」と話している。

同プロジェクトでは、今後5年間、年1回の割合でシンポジウムと公開講座を実施し、ホームページや研究年報などで順次、研究成果を公開していく。



▲松下教授(右端)を中心に英語英米文学科生たちが資料のデータベース化の作業を進めている(同教授研究室で)



▲1480年にフィレンツェで作成された中世の聖歌付き詩篇手稿写本

◎オープンリサーチセンター整備事業

文部科学省の私立大学学術研究高度化推進事業。学外の幅広い人材を受け入れたり、研究成果等を広く公開するなどオープンな体制の下で行われるプロジェクトの実施に必要な研究施設、研究装置、設備の整備に対し、重点的かつ総合的な支援を行う。平成13年度創設。

大学生の学びの道具箱 改訂版が完成

学ぶコツをつかんで「大学」を攻略しよう

専修大学出版企画委員会(大庭健委員長)が作成した「大学生の学びの道具箱 改訂版」が入学式で新入生に配布された。「高校までと大学とでは、勉強の仕方が違う。このギャップを埋めるための素材が必要」と、委員会での話し合いがスタートしたのが3年以上前。その必要性・意義・可能性について議論され、学生へのアンケートも参考にして昨年、初版が出された。改訂版は、インターネットや電子メールを使うときに気をつけることといった「イマの学び」も加わり、多少厚みを増した。取りまとめた大庭教授に伺った。

—初版の反響はいかがでしたか

概して好評でした。少なくとも私どもの耳には、好意的なご意見が多く届きました。予想外に多くの先生方が、1年次生だけに配布するのはもったいないから、自分のゼミの学生全員に渡したい、とおっしゃって下さいました。でも、初版についてのアンケートでは、厳しいご意見もありました。答えてくれたのは1年次生で5,600人、先生方で100人位だったと思いますが、一つひとつはごもっともなのだけど、両立しがたいご要望が結構ありましてね。

—改訂にあたり心がけた点は

とにかく、もっと分かりやすくすることでした。読む本でなく、見る本。いわゆる「攻略本」みたいなマニュアル本に近づけよう、と。

—第3章「本を読む」第4章「議論の進め方」にかなりのボリュームを割いているようですが

うーん、悩ましいお尋ねですねえ(笑い)。たしかにおっしゃるような印象はあると思いますが、それを意図したわけではありません。でも、本を読んだり、ひとと議論したりすると、全く違う世界というか考え方に会って、「え、え？」と驚きますよね。こうした驚きが、大学の原点というか存在理由なんです。

—この本をどのように活用してほしいですか

各章の初めの数ページは、イラスト入りで要点をまとめたので、ここは目を通してほしいですね。あとは、授業の聞き方とか、ノートの取り方とか、なんか気になったときに、目次と索引を頼りにパラパラめくってくれればいいんじゃないですか。通読するには、まだまだウザッタイ本だけど(笑い)、通読してくれる新入生がいると嬉しいですね。まあ、大学で学ぶコツみたいなもののヒントを得てくれれば、睡眠時間を削った甲斐もあったかな、と。

【改訂版の執筆分担者は、『学びの道具箱』の「あとがき」に記されています】

4教授が学位取得

▽田邊祐司文学部教授が1月20日付で広島大学から、博士(教育学)の学位を授与された。

学位論文名は「A Study of the Interaction—and Discovery—based Approach to Teaching English Pronunciation」

(訳:英語発音指導における「交渉・発見型アプローチ」の教育的効果に関する研究)

▽赤羽新太郎商学部教授が1月25日付で明治大学から、博士(経営学)の学位を授与された。

学位論文名は「国際企業経営者論研究—管理組織論を中心として」。

▽村上俊介経済学部教授が3月11日付で立命館大学から、博士(経済学)の学位を

授与された。

学位論文名は「市民社会と協会運動－交差する1848／49年革命研究と市民社会論－」。

▽高橋清徳法学部教授が3月23日付で京都大学から、博士(法学)の学位を授与された。

学位論文名は「国家と身分制議会－フランス国制史研究－」。

【ニュース専修2005年5月号2面】